コミュニティデザイン Journal



2026年7月15日

vol.100 記念号

CONTENTS

02 巻頭言
－100号に寄せて－

04 創刊号からふり返る
～表紙あれこれ～

06 歓迎！"さぽーと"

08 ちょっといいですか？
大西ですけど…

陽気会は「福祉ゾーン」としてのコミュニティの創造を目指します

陽気会は、1958年9月1日に知的障害児施設おかば学園を開所し、2025年の9月から68年目に入りました。私たちは、これからも私たちの生活の舞台としての"コミュニティ"をより暮らしていきやすくなるよう"デザイン"し、陽気会を拠点とした「福祉ゾーン」の創造を目指して、皆さまと力を合わせて実践していきます。

社会福祉法人陽気会　KOBE北・コミュニティデザインLab.

巻頭言　―100号に寄せて―

❖100号に寄せて

2018年4月に発行をはじめてから今号で100号になりました。巻頭言では、そのときどきの社会的な出来事をふまえ、ちょうどその時期に読んだ書籍とも関連づけながら、いろいろと想いを綴ってきました。

また、私事ではありますが、この6月の日本地域福祉学会の総会において学会長に選出されました。日本地域福祉学会は、1987年11月に設立された地域福祉に関する研究を目的とした学会で、初代会長は、日本の社会福祉学および地域福祉理論の泰斗である岡村重夫（元・大阪市立大学-現・大阪公立大学-教授）です。当学会は研究者と福祉現場の実践者で構成され、会員数は約1500名の学術団体です。私の就任挨拶は、学会ホームページに掲載されていますので、そちらもご覧ください（https://jracd.jp/society/greetings）。

❖「コミュニティデザイン」をめぐって

さて、本誌のタイトル「コミュニティデザイン（Community design）」は、この地域福祉とも関連した概念であるため、今回はそうしたことも含めて、「コミュニティデザイン」について論じてみることにします。この概念は、建築家の山崎亮による『コミュニティデザイン―人がつながるしくみをつくる―』（学芸出版社、2011）をひとつの契機として、広く用いられるようになりました。山崎は「コミュニティデザインというのは、人と人をつなげて、ある種のコミュニティを作って、地域の課題を解決していく力を付けるお手伝いをすること」と定義づけています。

地域福祉も地域の課題を解決するための取り組みですが、その場合の課題は、「福祉」すなわち「生活」や「暮らし」「健康」などの課題が地域生活において集約的に顕在化しているようなものですので、たとえば山崎が例にするような公園の整備を住民参加で行うというような取り組みは、直接的には地域福祉とはいえません。しかしそうした取り組みのプロセスを通じて、あるいはその結果できた公園に住民が集い、交流し、コミュニティ形成につながるような場合には、地域福祉的な取り組みであるともいえます。

このように概念規定をめぐって議論してもあまり生産的ではありません。ですので、なぜ本誌のタイトルとして「コミュニティデザイン」を用いたのか、その意図について説明することにします。この概念には、コミュニティに関して、そこに関係者すなわちステークホルダーがかかわることで、そのあり方をデザインし、具体的な活動を通じてコミュニティをつくっていく、つくり直していくということが含意されています。

❖日本社会の課題

社会には常に課題がありますが、今日の日本社会はちょうど平成の時代になった1990年代以降の社会のほぼ全領域にわたる停滞ぶりが露わになっています。「経済大会ニッポン」は見る影もなく、GDP（国内総生産）や消費者物価指数、国際競争力、国民所得などあらゆる経済指標で国際的な地位が低下しています。

高度経済成長期から昭和末期のバブル景気（1986～1991）の時期には、「経済は一流、政治は三流」と評されていましたが、その経済が地盤沈下し、政治にいたっては経済政策のみならず、労働政策や住宅政策、社会保障、災害復興、地方対策にいたるまで、どの領域に関してもなにひとつまともな政策的成果をあげていません。たとえば1990年代からの少子化対策にしろ、「平成の大合併」にしろ、むしろ状況を悪化させています。そして政治の基本である国会での審議は、必要な議論さえまともに行えないような状況にあります。

社会福祉領域においても、社会福祉基礎構造改革の議論として行われた「措置から契約へ」という改革の妥当性そのものが問われる状況になっています。介護保険制度は高齢者の保険料負担が増加の一途をたどり、1割自己負担を所得により3割にまで増額するなど、極限まで負担増を強いているものの、もはや保険制度としての存続が危ぶまれる状況にあります。この介護保険制度にしろ、障害福祉領域においても行政が事業所を「指定」するという制度設計自体のほころびがより顕在化してきています。いわゆる疑似市場のもとでの「競争原理」のもとで、利用者確保や職員確保ができないために施設・事業所が閉鎖に追い込まれる事態が頻発し、他方でグループホームなどにおいては「福祉で金儲け」を意図したビジネスモデルが横行するような状況にあります。

❖こうした社会を変えていくためには…

だからこそ、こうした社会を変えなければなりません。とはいえ、そのための処方箋が他力本願な政治への期待であるのなら望み薄です。なぜならその社会に暮らす人々の自治的な参加・参画なくして、“よい”社会、暮らしやすい社会は実現しないためです。

福祉国家の代表国である北欧諸国は、実は“地方自治”に基づく国家運営をしている国でもあるのです。いかに国民・市民・住民の参加・参画のもとで政治が行われ、国家が運営されているのかということは、多くの書籍で紹介されています（あぶみあさき（2020）『北欧の幸せな社会のつくり方―10代からの政治と選挙―』かもがわ出版）。

❖民主政を駆動させるコミュニティの存在

アメリカの研究になりますが、ポール・ラザースフェルド（Paul Lazarsfeld, 1901-1976）は、編著『ピープルズ・チョイス』（1948＝＝1990、有吉広介訳、芦書房）において、1940年のアメリカ大統領選挙に際して、5月から11月の間、オハイオ州エリー郡に滞在し、毎月3000サンプルのなかから600サンプルを抽出して面接調査を行い有権者の投票行動を分析した結果、人々の行動決定に強い影響力を持つ「オピニオンリーダー」の存在が投票行動に影響していることを明らかにし、「コミュニケーションの二段階の流れ」という仮説を提示しています。

オピニオンリーダーといえば、最近ではSNSを通じて強い影響力をもつインフルエンサーのような存在を思い浮かべがちですが、正しくは「メディアの受信者を包摂する近隣集団で影響力を持つ」住民のことで、戦前の「旦那衆」のような地域の有力者で、「その解釈はおかしいねぇ…」と諭してくれるような存在のことです（宮台真司・奥野克巳（2026『宮台式人類学―前提を遡る思考―』p.118））。そのような人が地域のなかに存在していることで、住民の意見に影響を与え、世論を形成し、投票行動に影響を与えているのだということを実証的に明らかにしたのです。

つまり、地域のなかに長年そこに暮らす地主や商店の店主などのいわゆる「旧中間層」にあたる住民やあるいは比較的社会的な地位も高く、安定した所得があるような専門職などの正規雇用者で、ある程度余裕があり地域活動にもコミットするような「新中間層」が分厚く存在することで、換言すれば“コミュニティ”が存在することで、政治への参加を可能とさせたのです。

❖コミュニティの空洞化

ところが、今日ではそうした“コミュニティ”が空洞化し、いわゆる「オピニオンリーダー」的な存在が喪失してしまったために、さらにはSNSの急速な普及によって、扇動的なあるいは真偽不明な情報を修正したり、中和するような機能がなくなり、極端な意見が流布し、選挙結果にも極端に影響を及ぼすようになっているのです。しかも、こうした状況をふまえて、ネット戦略を駆使して、選挙活動をするような事態が横行しているのです。

こうしたことふまえると、「民主制（具体的にはたとえば選挙）が、民主政（民主主義のもとでの民主政治）を機能させる」前提がなければ、この場合であれば、新旧中間層を主要な構成員として形成されるコミュニティのもとでの「オピニオンリーダー」の存在がなくなれば、民主政は瓦解してしまうのです（宮台・奥野p.118）。

❖「コミュニティデザイン」がめざすもの

このように民主“制”が民主“政”を機能させるためには、一定の条件が必要なのです。したがって、先に確認したような日本の社会の窮状をブレークスルーしていくためには（Breakthrough＝これまでの限界を突破し、新たな可能性や解決策を切り拓くためには）、そのための条件を整えることが必要であるといえます。

先の宮台によれば、コミュニティ（共同体）の定義には、マッキーバー（Robert M. MacIver, 1878-1970）による特定の目的や関心を達成するために、人々が意識的・人為的につくり上げた集団であるアソシエーションに対置するかたちで、「全生活時空の共有を前提に誰もが同じ事象を同様に体験する自然発生的な集団」だというものがあります。また、ヴェーバー（Max Weber、1864-1920）によるコミュニティの「内は掟、外は法」という二重性や、モース（Marcel Israël Mauss、1872－1950）のコミュニティの「内は贈与、外は交換」という二重性により説明する定義もあります（宮台・奥野pp78－79）。

こうした議論をふまえれば、コミュニティの空洞化とは、たとえばモースがいう善意に基づく「贈与」的な関係が、損得勘定に基づく「交換」的な関係と置き換わっていくことであり、それまで習慣的に維持されてきた暗黙の「掟」的なルールが、明文化され法律制度に基づく「法」に置き換わることであり、人口学的流動性では「土地にゆかりなき者が多数化」していく（「新住民化」していく）状況であるともいえます。そこでは人格的、記銘的な関係が消え、匿名的な没人格的関係が主流を占めるようになり、人々の人生や生活から「尊厳」が喪失し、力が湧かなくなるという状況になっていくことを意味します（宮台・奥野pp.81-83）。

さて、本誌でいう「コミュニティデザイン」は、地域福祉的な観点も重視しながら、こうした状況をよりよい方向へと変えていくための処方箋を探ることを目的としています。とはいうものの、かつてのフランス革命の挫折が示すように、理性的に考え、企図し、行動しても、社会はそのようにならないということを私たちはすでに知っています。では、どのように考え、行動すればよいのか。本誌ではそうした思索の旅路を皆さんと共有するものです。

KCDラボ代表　松端 克文

創刊号からふり返る　～表紙あれこれ～

2018年4月から始まった本誌ですが、改めて見直してみると、創刊号から少しずついろいろなところが変わってきているということに気づきます。“よりよく”を目指して、フォントや文字の間隔・行間など、わずかなことですが、試行錯誤しながら毎月のように“マイナーチェンジ”していたことを思い出しました。

ここでは巻頭言のタイトルや写真で、創刊号からふり返ってみました。気になったものがありましたら、ぜひバックナンバーをご覧ください！

〈100号までの主な法人の動き〉

2018年　4月　KCDラボ開設
　　5月　デイセンター開設
　　6月　みのたに園短期入所事業開設
2019年　4月　しごとサポート北部開設
　　12月　ほっとランド（放課後等デイサービス）開設
2020年　8月　地域連携室開設
2021年　4月　有野ひだまり保育園（事業所内保育園）開設
　　4月　医療連携室開設
2022年　4月　ハートフルホーム開設
　　（共同生活援助日中サービス支援型）
2024年　10月　谷上ホーム開設
　　（共同生活援助介護サービス包括型）

巻頭言タイトル

vol.1　研究所設置にあたって
vol.2　コミュニティをデザインするということ
vol.3　「誇り」と「使命感」、そして「一体感」を !?
vol.4　私たちは何を大切にして実践するのか
vol.5　結論を急ぐのではなくて
vol.6　テレビドラマから
vol.7　家族の扶養責任って… !?
vol.8　“共感”する力について
vol.9　“ストーリー”から“シーン”へ
vol.10　「生きづらさ」を超えて
vol.11　複眼的な視座で考える習慣を！
vol.12　児童虐待をめぐって
vol.13　コミュニティ・サロン
vol.14　認めるけど、認められない !?
vol.15　話し合うことの大切さ !?
vol.16　「保守的な悪魔化」の罠
vol.17　自己の利益を超えて
vol.18　“私たち”という共同性の感覚
vol.19　卵の側に立って“リジョイス”！
vol.20　私たちに、この“社会”を“変える”ことができるのか？



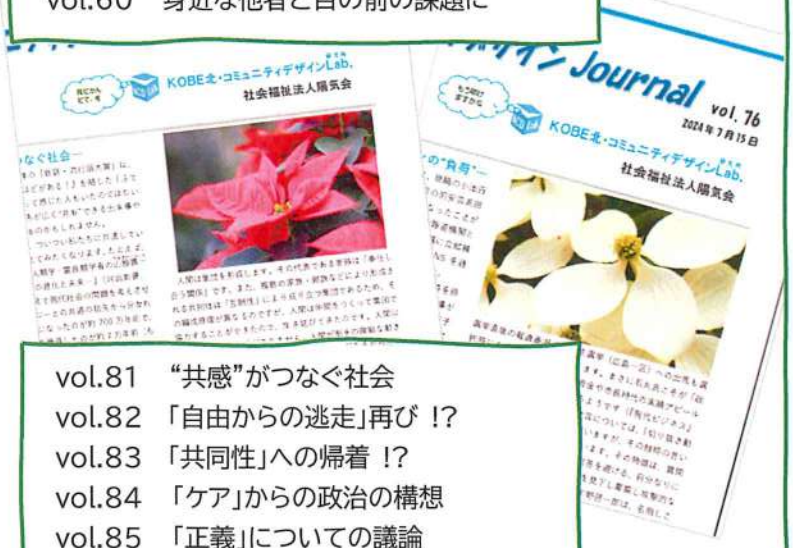


vol.21　「“陳腐”な役人」でなくて…
vol.22　“私的”なこと／“公共的”なこと
vol.23　“主体性”について
vol.24　“善き者”になる
vol.25　コメディリリーフ
vol.26　社会不安のもとでの“魔女狩り”
vol.27　“民主的”であるということ
vol.28　いったいなんのために !?
vol.29　「再帰的」な社会で
vol.30　尊厳死・安楽死をめぐって…
vol.31　「家族主義」を超えて
vol.32　「多数決」をめぐって…
vol.33　ソウル・メイキング
vol.34　ラカンの世界
vol.35　「対象a」から読み解く世界
vol.36　生存権の保障
vol.37　SDGsな思考法
vol.38　SDGsな取り組み
vol.39　AIと人間
vol.40　届かない声

vol.41　“自己中”な世界だけで生きれたら…
vol.42　「生きる」ために生きている
vol.43　「収奪」の構造とその「不可視化」
vol.44　「脱成長」と「平等の実現」
vol.45　教育と社会化
vol.46　存在が肯定されるということ
vol.47　「自助」の国・ニッポン
vol.48　“イマジン”と“オシント”
vol.49　“大人”になるって
vol.50　“脱・アノミー”×“脱・フェイス”
vol.51　鏡に映った“私”
vol.52　「意味」と「実存」
vol.53　「宗教」の機能
vol.54　ケアする民主主義
vol.55　政治的な問題としての「ケア」
vol.56　哀悼のことば
vol.57　おもちつき
vol.58　歴史・文学・思想・学び
vol.59　“非社会”的で、“個人化”した社会
vol.60　身近な他者と目の前の課題に



vol.61　“劇的”な大谷現象の精神分析
vol.62　“我思う、故に我あり”か？
vol.63　希望も、絶望も…
vol.64　“正当性”と“正統性”
vol.65　“荘厳”な存在と“交響”する
vol.66　“人間味”のある人
vol.67　“正義”という“美徳”ゲーム
vol.68　「最大多数の最大幸福」と正義
vol.69　カジュアルでフラットな関係
vol.70　コミュニティ・プラクティス
vol.71　“コミュニティ”での／への実践
vol.72　“ぬくもり”のある関係づくり
vol.73　“本質”あるいは“真理”への欲望
vol.74　都合よく“エビデンス”!?
vol.75　アップデートなき福祉教育
vol.76　コミュニケーションの“負荷”
vol.77　人にとっての“暇”と“退屈”
vol.78　“退屈”の考察から哲学へ
vol.79　“退屈”の考察から哲学へ
vol.80　午後４時に退勤できる社会



vol.81　“共感”がつなぐ社会
vol.82　「自由からの逃走」再び !?
vol.83　「共同性」への帰着 !?
vol.84　「ケア」からの政治の構想
vol.85　「正義」についての議論
vol.86　「正義」と「善行」のジレンマ
vol.87　“他者”との“対話”の大切さ
vol.88　「功利主義」と「自由主義」
vol.89　カント哲学における「自由」
vol.90　“正義”と“美徳”
vol.91　“正義”に関する目的論
vol.92　「まやかしの言論」を見抜く力
vol.93　モラル・エンハラスメント
vol.94　3.5 パーセントの希望と可能性
vol.95　砕ける“正しさ”を取り戻すため
vol.96　“Imagine” 再び !!
vol.97　「市場／国家（政府）」を超えて
vol.98　ハインツのジレンマ
vol.99　自己を他者へ開くということ



歓迎！
～ ようこそ “さぽーと” ～

月刊誌『さぽーと』（公益財団法人日本知的障害者福祉協会発行）から、編集出版企画委員の寺岡栄一さまが、取材および見学のため、5月20日に当法人に来られました。その際の様子を報告します。

◆このたびの取材・見学の経緯

ご訪問いただいた寺岡さまは、富山県にある射水市障がい者基幹相談支援センターの相談支援専門員で、『月刊さぽーと』の編集出版企画委員会の委員をされています。

今回の取材／見学のきっかけは、昨年度の全国知的障害関係施設長等会議の分科会において、私が発表した内容および資料でした。

“強度行動障害支援”を軸にした知的障害支援と、人材育成についての私たちの取り組みに関心を寄せていただき、今回当法人までお越しいただくことになりました。

（よろこび荘：大谷 健太、以下大谷）

◆それぞれの見学先で ― みのたに園

みのたに園では、構造化や視覚支援をベースに環境を整えていますが、私のこだわりでこれらの表現を使わず「わかりやすく、感じよく」を支援の方針にしていることをお伝えしました。

ご利用者だけでなく、職員に対してもわかりやすく、感じよく。

活動内容や物の場所をわかりやすくすることで、ご利用者が自分で取り組めることが増える、活動や過ごし方を選ぶことができるように工夫している点と、ご家庭でもできる配慮を意識している点に強く興味を示されていました。

（みのたに園：遠山 伸一）





◆それぞれの見学先で ― よろこび荘

よろこび荘は3フロア制になっており、自閉スペクトラム症の方に対する支援を基礎にしていること、それぞれのフロアで、ご利用者の状態像にあわせた体制をとっていること、職住分離で活動の場と生活の場は分けて支援を行っていることをまずお伝えしました。　以下がお話した内容です。

「ご利用者は60名おられ、平均年齢は45歳、平均支援区分は6、行動関連項目10点以上の方が58名で、その内46名の方が18点以上の方です。

1階は高齢のご利用者が中心で、環境も外へアクセスしやすく移動しやすい構造になっています。年齢に配慮した介護中心の支援で、活動も“ゆっくり提供・ゆっくりかかわる”ということを意識しています。2階はADLの自立度が比較的高い若いご利用者が中心で、職住分離が意識されており、日中はデイセンターや生活介護事業所などに通うご利用者もおられます。また特に“構造化支援”を意識しています。3階は強度行動障害等の理由で、支援が困難な方が主に利用されています。生理的条件である“食事・睡眠・排泄”などの生活リズムを整えることを優先して支援を行っており、困難ケースも受け入れています」

今回はこのようなご縁をいただき、がんばって取り組んできてよかったと、とても嬉しく思いました。でも、お話を伺うなかで『さぽーと』への掲載ということがわかり…かなりびっくりしました!!『いきいきスタッフ』のページでもよろこび荘のリーダー大杉さんが掲載されますが、支援について深めることができている人材を『さぽーと』で取り上げていただけることも大変嬉しく思っています。　（大谷）





◆それぞれの見学先で ― おかば学園

家庭的な雰囲気を大切にし、子どもたちが安心・安全に暮らしていくことを基本に、毎日幸せを感じてもらえる支援を目指していることをお伝えしました。

具体的には、それぞれの子どもに合った構造化された支援、充実した日中活動の提供など、日ごろの子どもたちの様子を交えながら、職員の取り組みについてお話しました。

（おかば学園：安田 和晃・浜口 綾太）

◆それぞれの見学先で ― ひだまり園

49～90 歳までのご利用者に支援を行っている高齢者身体重度者介護支援施設であること、車椅子利用の方が多いためトイレは 2 室に 1 か所を共有できるようにつながりのある構造で設計されていること、週間予定（入浴や日中活動、外出など）については“予定ボード”を使用していることなどをお伝えしました。

また、ひだまり園ではご利用者／支援員双方の安全確保と負担軽減のため、介護リフトを導入して移乗が安全に行える体制を整えていることや、“ピュアット”（浴槽内にマイクロバブルを発生させることで、身体を擦らずに汚れを落とすことができる機械）を導入していることもお話し、興味深く見学していただきました。　（ひだまり園：深草 裕樹）



◆それぞれの見学先で ― ハートフルホーム

日中サービス支援型共同生活援助の施設として、どのようなご利用者が普段生活されているかをお伝えし、施設内を見学していただきました。

各エリアをご覧いただきましたが、そのなかでも「風呂エリア」で機械浴（リフト式・車いす用）・大浴場・ユニットバスと、多種の入浴設備を完備していることに関心を寄せていただきました。

短い時間ではありましたが、今回の見学を通してハートフルホームの全体像を感じ取っていただけたのではないかと思います。

（ハートフルホーム：武本 英樹）

◆それぞれの見学先で ― ようき寮

ようき寮では、39 名（男性 27 名、女性 12 名）のご利用者の居住空間がほぼ全室個室化され「3 名で 1 ユニット」を構成している環境や、ご利用者が自身の好みに合わせて自由にレイアウトされている居室の様子を見ていただきました。

また高齢化が進んでいることや、自閉傾向が強い方から自立度の高い方まで非常に幅広いニーズや障害特性のある方々が生活されていること、そのため「日中活動の環境設定」「食事時間の分散」「視覚支援」などを工夫し、個々の特性に応じて、見通しをもって、安心して、主体的な生活を送っていただけるように取り組んでいることをお伝えしました。　（ようき寮：池田 哲史・坂本 江里菜）

限られた時間でしたが、上記の施設・事業所のほかにも、デイセンターや放課後等デイサービスほっとランド、児童発達支援センターおかば学園も見学していただき、ご案内を通してよい刺激を受けることができました。ありがとうございました。こちらの様子は『月刊さぽーと 8 月号』に掲載される予定とのこと。いまからとても楽しみです。

ちょっといいですか？大西ですけど…

－100 号！－

◆ちょっといいですかをふり返る

このコミュニティデザインジャーナル、ついに 100 号になりました。ということは、なにかよくわからないタイトルがついているこのコラムも 100 回書き続けてきたことになります。発刊当初から、タイトルにあわせるかのように、少し違った視点から障害者福祉の現状や業界にかかわる方々にモノを申す、というようなイメージで、私個人の意見を書いてきました。多くの場合、意見というよりも、独断・偏見・主観でしたが…。

会議中等に「ちょっとよろしいでしょうか？」といった前置きで意見が出される場合、その多くは、否定的な意見であったり、別角度からの考え方の意見であったり、流れをかえるような意見であったり、総じて肯定的な意見でない場合かと思います。このコラムも同じように、福祉の制度や施策をはじめ、関連する出来事や、福祉に関する考え方、職員としての資質等を、どちらかというと否定的、反論的に捉えてきました。

人に言わせれば、それだけ私自身の考え方や見方が歪んでいるとのことですが、あえて、違った視点、別の角度から物事を考えるようにしてきました。皆さまから、反対意見や批判、賛成意見や共感等をあれこれといただきながら、私自身の考えや思いを自由に書いてきました。ただ、行数は毎回 21 行で、その中に小見出しを 2 つ入れるというマイルールがありましたので、字数にやや苦慮したこともありました（今月号は行数が 27 に増えています！）。

◆福祉業界をふり返る

ジャーナルが創刊した 8 年前と比べ、障害者福祉を取り巻く状況は、大きく変わりました。この間、令和 3 年と令和 6 年の報酬改定を経て、制度はより複雑化し、数値化が進んできました。この業界を管理・指導する行政の視点も、いい支援をしているか？から、数字を間違えていないか？適切な数字を出しているか？ということが重視されるようになってきました。最近、私自身、福祉の充実度はもはや数字によってのみ判断される時代へとなっていくような危機感を覚えています。

職員の働き方も大きく変わりました。給料・労働時間・休日数という 3 つの数字で人材が左右されるという傾向が強まってきました。とか言っている私自身も、報酬・加算・利用率・収支差額とかといった数字に敏感に反応するようになりました。報酬（収入）のわずか数パーセントの変動に一喜一憂し、ことあるたびに電卓とエクセルとにらめっこする状況に陥っています。おそらくこの状況はこの先も続いていくのでしょう。

一方では、「人財不足」が定着し、いまや人材紹介会社はある意味優良企業に成長しています。私たちと求職者の立場は完全に逆転しました。さらに、ここ数年の間に、福祉業界にも ICT や AI が入ってきました。AI を使うことは賛成ですが、AI に使われないようにしていくことが必要ですね。

どうやらこのジャーナルはこの先も発刊し続けるようです。引き続きのご愛読よろしくお願いいたします。（大）

編集後記

100 号という大きな節目をこの 7 月号で迎え、ようやく発行することができました。ここまで歩んでこられたのは、読んでくださる皆さまをはじめ、支えてくださった多くの方々のお力添えのおかげです。心より感謝申し上げます。初の『記念号』ということで、今回から誌面をすこしリニューアルしています。ご意見、ご感想等いただけますと幸いです。

これからも地域に寄り添い、日々生まれる声や気づきに耳を澄ませながら、学びとつながりを育む誌面づくりを心がけ、一歩ずつていねいに歩みを重ねていけたらと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。(A)

ラボサポーター（協力会員）募集中です

施設・事業所サポーター　年間 10,000 円

個人サポーター　年間 1,000 円

サポーターの皆さま、いつもありがとうございます

ホームページはこちらから
バックナンバーも！

〈発行元・連絡先〉
〒651-1313
神戸市北区有野中町 2-5-19
社会福祉法人陽気会
KOBE 北・コミュニティデザイン Lab.
Tel：078(981)7271
Fax：078(981)0825
HP：https://youkikai.or.jp
Email: kcdlab@youkikai.or.jp